

たじみん昼話 1 4

そっけなさの中に奥義あり

「十有五にして学に志し、三十にして立ち、四十にして惑わず。」人生の迷いを救うバイブル的キャッチコピー集として有名な、孔子の論語の中の言葉だ。皆さんは、この言葉をどのように解釈するだろう。

論語の解釈は難しい。それは孔子が全てを語っておらず、漢字の読み方も多様な解釈が存在するからだ。それでも人気があるのは、今でもここから学ぶことが多いからだ。

『論語』は、孔子主宰の私塾(所謂、ざ・孔子の〇〇セミナー)の講義や、あちらこちらでポロリと話したことを、聞いた人がまとめたものだ。聖書でいうと、キリストの弟子であるマタイ・マルコ・ヨハネ…〇〇による福音書であり、プラトンでいうと師匠のソクラテスの話を筆記したパイドロスや饗宴に相当する。つまり、全て弟子が書いたものなのだ。(歴史書『春秋』は孔子作だ、という説は怪しいとされている)でも、こんな凄いことを言える人がなぜ自分で書かなかったのだろうか。

勝手な解釈をすると、「①面倒くさかった。②字が書けなかった。③重要なことをワードで書き記すと、その言葉にとらわれて本質を理解してもらえないと考え、トークのみになった」のいずれかであろう。中味の凄さからすると、①と②はありえないので、恐らく理由は③だろう。大雑把な表現提示により、読み方の深度を深くさせて様々な解釈を引き起こし、深い思考を継続させようと意図しているのであろう。高校生の頃から、何回も論語・パイドロス・饗宴を読んでいるが、読むたびに新しい解釈や謎が浮かび、未だ読了感を得られず鮮度を保っているのは、この畏にはまっていたのだろう。恐るべし昔の識者達。2000年を経てもなお、こんな仕掛けにより我々を教育するとは。

ところで、生徒の皆さんが受けてきた授業はどのように進んでいたのだろうか。論語ほどシンプルでそっけないことはないと思うが、先生は全ての学習内容を語らないのではないだろうか。学習内容を伝えるときは、間接的なヒントを板書(ホワイトボード)して、「内容に気づいてね」と、メッセージを送信していたはずだ?「話す内容の行間を読み取ってね」「文脈からいろいろ解釈してね」と、メッセージ発信の連続で多くの授業が進んでいたのではないだろうか。

この授業が行われている理由は、「生徒と先生が協力して創り上げるプロジェクトが授業である」という桔梗コンセプトによるものだ。一見不親切に思える授業方法だが、考える力をつけるという点では、合理的でとても親切な授業方法であるといえ、原点には孔子の理念があるというすごい授業なのだ。

学校が再開したら。そんな視点で授業を俯瞰しながら受け、学習内容の本質を見抜いて欲しい。